

那覇教区 要理教育書

— 沖縄の風景に聞く、教会のことば —

下巻

第21課～第30課

本書について

本書は、沖縄の風景・歴史・習俗を手がかりに、聖書と教会の教えを読み解く全30課からなる要理教育書です。那覇教区における求道者養成および信徒リーダー（要理教師候補）養成での使用を目的として編まれました。

各課は「一、沖縄の風景から」「二、教会は何を教えるか」「三、日々の生活へ」「四、結びの黙想」という一貫した構成をとり、続けて「◆要理のまとめ」（学びの要点・カテキズム参照・用語解説）と「◆分かち合いの問い」（求道者向け／信徒リーダー向け）を収めています。

「教会は何を教えるか」の章句は、聖書と『カトリック教会のカテキズム』（CCC）を中心とした教会の伝統的な教えを、沖縄の具体的な風景から立ち上がる問いに応答する形で展開しています。

指導者は、参加者の状況に応じて分かち合いの問いを選択し、あるいは両方を織り交ぜて用いることができます。カテキズム参照は、実際の講座で使用する前に一度照合されることをお勧めします。

目次

- 第21課 ユタ 「人はなぜ見えないものを求めるのか」
- 第22課 那覇空港 「人はなぜ帰る場所を求めるのか」
- 第23課 泊港 「待つことに意味はあるのか」
- 第24課 慶良間の海 「見えないものは存在しないのか」
- 第25課 伊江島補助飛行場 「土地は誰のものなのか」
- 第26課 アメリカンビレッジ 「豊かさは人を自由にするのか」
- 第27課 台風前日のスーパー 「備えることと恐れることは違うのか」
- 第28課 24時間営業のコンビニ 「孤独は悪なのか」
- 第29課 普天間飛行場 「危険は誰が引き受けるのか」
- 第30課 教会 「沖縄は教会に何を教えるのか」

第21課 ユタ

テーマ:「人はなぜ見えないものを求めるのか」

一、沖縄の風景から

看板は、出ていません。住宅街の、ごく普通の一軒家です。知人の知人から電話番号を教わり、日を決めて、訪ねます。仏間に通されて、生年月日と干支を告げると、その人は目を閉じ、しばらく黙り、やがて語り始めます。

ユタと呼ばれる人々です。家族の病が続く。事故が重なる。仏壇の移し方が分からない。屋敷の御願が滞っているのではないかと。人々は、人生の説明のつかない局面で、ユタの門を叩き、判断、ハンジを仰ぎます。沖縄には、医者半分、ユタ半分、という言葉があります。病院で治療を受けながら、ユタにも尋ねる。ふたつは、多くの人の中で矛盾なく同居してきました。

ユタになる道もまた、平坦ではないと言われます。カミダーリと呼ばれる、原因の分からない不調と苦しみの時期を経て、拒みきれずにその役割を引き受ける。望んでなるというより、選ばれてしまう。そういう語られ方をする務めです。

合理の時代です。それでも、あの住宅街の一軒には、今日も誰かが、静かに靴を脱いでいます。

近代は、見えないものを追放したはずでした。病気には病名がつき、不運には確率がつき、世界は説明可能になったはずでした。

それでも人は、見えないものの前に座りに行きます。沖縄に限った話ではありません。占いの行列、パワースポットの人波、書店のスピリチュアルの棚。

人はなぜ、見えないものを求めるのでしょうか。それを迷信と切り捨てる声と、信仰と呼びたい声との、あいだで。

二、教会は何を教えるか

最初に、はっきりさせておくべきことがあります。教会は、見えないものを求める人を、嗤う資格を持ちません。教会自身が、見えない世界を語る共同体だからです。信条の第一行で、教会は告白します。天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を信じます、と。天使を語り、聖人の執り成しを語り、摂理を語り、死者のために祈る。見える世界がすべてだ、という世界観に、教会は最初から与していないのです。ですから、迷信か信仰か、という二択で裁く道は、ここでは取りません。

その上で、考えてみたいのです。人がユタのもとへ運んでいくものは、何でしょうか。多くの場合、それは、なぜ、という問いです。なぜ、うちの家系に不幸が続くのか。なぜ、あの子が病気になったのか。そしてハンジは、原因を指し示します。何代前の誰の供養が滞っている。屋敷のどこの拝みが欠けている。原因が特定されれば、手の打ちようがあります。宙づりだった苦しみに、意味の座標が与えられるのです。その安堵の切実さを、軽んじることはできません。

けれども聖書は、この、原因の特定、について、慎重な記憶を持っています。ヨブ記です。すべてを失ったヨブのもとに、友人たちがやって来て、原因を説明します。あなたが苦しむのは、あなたに罪があるからだ、と。因果の説明としては筋が通っています。そして物語の最後で、神はその説明を、退けるのです。福音書でも、弟子たちが、生まれつき目の見えない人を前に尋ねます。この人が生まれつき見えな

いのは、本人と両親のどちらが罪を犯したからですか。イエスの答えは、どちらでもない、でした。苦しみと罪を直結する因果の線を、イエスは切ったのです。

なぜ教会は、原因の答えを配らないのか。原因の特定は、しばしば、新しい重荷を生むからです。あなたの家系のせい、あなたの拝み方が足りないせい。答えは安堵を与えると同時に、責めの宛先を作ります。教会は、なぜ、という問いに対して、因果の答えの代わりに、共にいる方を指し示す道を選んできました。答えのないまま、問いのそばに座り続ける。それは頼りなく見えますが、二千年の考え抜かれた頼りなさなのです。

最後に、教会自身に返ってくる問いがあります。人々がユタのもとへ行くのは、何時間でも家族の物語を聞いてくれる場所が、そこにあるからでもあります。見えない世界を語る共同体でありながら、見えない痛みを聞く時間を、教会は失っていないでしょうか。門を叩く人の切実さを裁く前に、叩かれなかった自分の門を、教会は振り返る必要があるのです。

三、日々の生活へ

あなたにも、なぜ、と問うた夜があるはずです。なぜ、私だったのか。なぜ、あの人だったのか。

そのとき、原因の答えは、甘い誘惑として現れます。誰かのせい、何かのせいにできれば、苦しみは整理されます。けれども、その整理が、自分や他人を責める鎖に変わっていくことも、私たちは知っています。原因探しが、癒やしではなく、二番目の傷になることがあるのです。

もうひとつ、身の回りを見渡してみてください。あなたの周りに、答えをくれる人はたくさんいるでしょう。けれども、答えを急がずに、ただ聞いてくれる人は、何人いるでしょうか。そして、あなた自身は、誰かにとって、そういう人であるでしょうか。

見えないものへの飢えは、たぶん、消えません。それは人間の欠陥ではなく、人間の深さです。問題は、その飢えを、誰と、どう抱えるか、なのだと思います。

四、結びの黙想

あなたの中の、なぜ、をひとつ、取り出してみます。

今夜は、答えを探しにいきません。

問いを、そのまま、見えない方の前に置いてみます。

置けたなら、それはもう、呪いではなく、祈りです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 教会自身が信条の第一行で「見えるもの、見えないもの」の造り主を告白する共同体であり、見えないものを求める人を嗤う資格を持たない。
- ・ ヨブ記とヨハネ福音書9章は、苦しみと罪を直結する因果の説明を退ける聖書の伝統を示している。
- ・ 教会は「なぜ」という問いに因果の答えを配る代わりに、共にいる方を指し示す道を選んできた。

- ・ 見えない世界を語る共同体でありながら、見えない痛みを聞く時間を教会が失っていないか、という自己吟味が求められる。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 328-336 天使と見えない世界の存在について。

CCC 2116-2117 占い・魔術についての教えと、神への信頼との区別。

CCC 307 神の摂理と人間の自由な協力について。

ヨハネ9:1-3 生まれつき目の見えない人——イエスは苦しみと罪を直結する因果を切った。

用語解説

摂理 神が世界と人間の歴史を導く配慮。人間の自由な協力を排除しない。

占い 教会は原因を告げる占いや魔術的な実践を戒めるが、その背後にある「なぜ」という切実な問いには丁寧に向き合う必要がある。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの中の「なぜ」を一つ取り出してみましょう。今夜は答えを探しにいかず、その問いをそのまま神の前に置いてみます。
- ・ 答えを急がずにただ聞いてくれる人は、あなたの周りに何人いますか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 占いや民間信仰に頼る信徒・求道者に対し、「迷信か信仰か」の二択で裁かず、その背後の切実さに向き合う司牧姿勢をどう具体化しますか。
- ・ 「見えない痛みを聞く時間を教会が失っていないか」という自己吟味を、小教区の傾聴・同伴の体制づくりにどう反映させますか。

第22課 那覇空港

テーマ:「人はなぜ帰る場所を求めるのか」

一、沖縄の風景から

三月の那覇空港は、涙の多い場所です。出発ロビーの保安検査場の前で、進学のために島を離れる子と、見送りの家族が向き合っています。母親が何度も同じことを言い、友人たちが花束を押しつけ、誰かが指笛を鳴らします。ゲートの向こうへ消えるまで、みんな手を振り続けます。

到着ロビーには、めんそーれ、の文字。帰省の季節には、ここが再会の舞台になります。ゲートから出てきた顔を見つけて駆け寄る子ども。骨壺を抱えて静かに帰ってくる家族も、この島には少なくありません。

そして数年に一度、この空港は、不思議な帰郷を迎えます。世界のウチナーンチュ大会。ハワイから、ブラジルから、ペルーから、移民の子孫たちが、何千人も、帰ってくる、のです。その多くは、この島で暮らしたことが一度もありません。曾祖父母が船で離れた島に、初めて降り立って、彼らは言います。ただいま、と。

一度も住んだことのない場所に、帰る。空港のロビーは、その不思議が実際に起きる場所です。

人は、帰る場所を求めます。それは分かります。分からないのは、その、帰る場所、の正体です。

生まれた家でしょうか。けれども、実家が失われた人にも、故郷が変わり果てた人にも、帰りたい、という感情は残ります。ウチナーンチュ大会の人々に至っては、見たこともない島を故郷と呼びます。

帰る場所とは、過去のどこかに固定された点なのでしょう。人はなぜ、帰る場所を求めるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

意外に思われるかもしれませんが、聖書の信仰は、帰郷ではなく、出発から始まりました。あなたは生まれ故郷を離れて、わたしが示す地に行きなさい。アブラハムに告げられたこの言葉が、すべての始まりです。行き先は示されていません。示す地、とだけ。信仰の父と呼ばれる人は、故郷を捨てた人だったのです。

新約聖書のヘブライ人への手紙は、この系譜を振り返って、印象深いことを書いています。彼らは、自分たちが地上では旅人であり、仮住まいの者であると、公に言い表した。そして、更にまざった故郷、天の故郷を熱望していた、と。ここに、奇妙なねじれがあります。彼らが熱望した故郷は、背後にはありません。前方にあるのです。帰る場所が、まだ行ったことのない場所である。キリスト者は古来、自らを巡礼者と呼んできました。第二バチカン公会議も、教会を、旅する神の民、と描きました。定住地ではなく、道の途中が、教会の住所なのです。

ここで、故郷礼賛と信仰との違いが見えてきます。過去の故郷への郷愁は、美しいものですが、人を後ろ向きに縛ることがあります。昔は良かった、あの頃に帰りたい。その故郷は、記憶の中で年々美化され、現実の帰郷はたいがい、少し寂しい答え合わせになります。聖書の語る帰還は、向きが逆です。放蕩息子が帰り着いたのは、昔の暮らしの続きではなく、新しい宴でした。黙示録の見た最後の風景では、人が天の都に登っていくのではなく、都のほうで、天から降りて来るのです。最終的な帰郷は、過去への復帰ではなく、前から来る何かとの出会いとして描かれています。

だとすると、ウチナーンチュ大会の、あの不思議な、ただいま、は、示唆的です。彼らの帰郷は、記憶の再訪ではありません。会ったことのない祖先の物語を受け取り、見たことのない島を故郷と呼ぶ。それは過去の反蜀ではなく、物語への応答であり、ほとんど、約束への応答です。帰るとは、後ろへ戻るのではなく、自分がどこに属するかという呼びかけに、前を向いて答えることなのかもしれません。

本書の第6課で、アウグスティヌスの祈りに触れました。あなたのうちに憩うまで、私たちの心は安らぎを得ない。あの、憩いの場所は、地図のどこにもありません。人の心に刻まれた、帰る場所への飢えは、地上のどの住所でも完全には満たされない。教会はそれを、欠陥ではなく、方角だと考えてきました。飢えの向いている先に、故郷がある、と。

三、日々の生活へ

実家がもうない人。故郷の町並みが変わり果てた人。転勤続きで、どこが地元か答えられない人。帰る場所の話は、そういう人たちを、そっと傷つけることがあります。

けれども、帰る場所が前方にあるのなら、話は変わってきます。帰る場所とは、過去に建てられた家ではなく、ただいま、と言える関係のことです。そしてその関係は、これから作ることができます。夕食を囲む数人。何年ぶりに会っても続きから話せる友人。あなたを待つ人がいる場所は、そこがどこであれ、帰る場所になり得ます。

年を重ねた人々が、死を、帰る、という言葉で語ることがあります。お迎えが来る、あちらに帰る。それは諦めの言葉ではなく、この世の旅を巡礼として生きてきた人の、方向感覚なのだと思います。出発の朝から今日まで、私たちはずっと、旅の途中です。だとすれば大切なのは、立派な家を背後に持つことではなく、前方の呼び声を聞き分ける耳を、失わないことでしょう。

四、結びの黙想

あなたの、帰る場所、を思い浮かべてみます。

それは、過去にあるでしょうか。前方にあるでしょうか。

今夜、ただいま、と言いたい相手の顔を、ひとつ。

その人のいる方角が、あなたの故郷の方角です。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書の信仰は帰郷ではなく出発(アブラハムの召命)から始まった——「行き先は示されていません」。
- ・ ヘブライ人への手紙は、信仰者を「地上では旅人であり仮住まいの者」と呼び、天の故郷は背後ではなく前方にあるとする。
- ・ 放蕩息子が帰り着いたのは「昔の暮らしの続き」ではなく「新しい宴」だった——帰還の向きは逆である。
- ・ 帰る場所とは過去に建てられた家ではなく、「ただいま」と言える関係のことであり、それはこれから作ることができる。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 145-146 アブラハムの信仰——「あなたの信仰に倣う」(ローマ4:11-12参照)。

CCC 769 教会は地上において「旅する神の民」である(教会憲章)。

CCC 1817-1821 希望の徳——天の故郷への熱望。

ヘブライ11:13-16 信仰者は地上では旅人・仮住まいの者であり、更にまさった故郷を熱望した。

用語解説

巡礼者 地上を旅の途中にある者として自らを理解するキリスト者の自己認識。

天の故郷 地上のどの場所にも完全には満たされない、心の帰るべき究極の場所。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの「帰る場所」は、過去にありますか、それとも前方にありますか。
- ・ 今夜「ただいま」と言いたい相手の顔を一つ思い浮かべてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 移住者・出稼ぎ者・海外にルーツを持つ信徒(世界のウチナーンチュ大会の例)に、「巡礼者としての教会」の神学をどう分かりやすく伝えますか。
- ・ 「故郷礼賛と信仰の違い」という区別を、望郷の念に苦しむ信徒への霊的同伴にどう活かしますか。

第23課 泊港

テーマ:「待つことに意味はあるのか」

一、沖縄の風景から

那覇、泊港。とまりんと呼ばれるターミナルから、慶良間へ、粟国へ、渡名喜へ、大東島へ、船が出ます。

待合所には、島に帰る人々が座っています。足元にクーラーボックス、段ボール箱、本島で仕入れた買い物の袋。工事の道具を抱えた人、部活の遠征帰りの中学生。壁の運航案内を、みんなが時々見上げます。

海が荒れると、赤い文字が出ます。欠航。台風の季節には、それが何日も続きます。船が出なければ、島の商店の棚は薄くなり、島の人、あるもので暮らしながら、海が凪ぐのを待ちます。騒ぐ人は、あまりいません。海に文句を言っても仕方がない、ということを、島の暮らしは知っているからです。

防波堤の先で、灯台が点滅しています。船を待つ人の島と、島を待つ港と。ここでは、待つことが、暮らしの技術のひとつなのです。

待つ時間を、現代は、無駄と呼びます。待たせないことがサービスの質であり、待てないことが、いつの間にか標準になりました。数分の遅延に苛立ち、返信のない数時間に不安になる私たちは、史上最も、待つのが下手な人類かもしれません。

けれども、人生の大事なものは、たいてい、待たされます。検査の結果も、人の心も、子どもの成長も。

待つことに、意味はあるのでしょうか。それとも待つ時間は、ただ耐えるだけの、空白なのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書の民は、待つ民でした。奴隷の家からの解放を待ち、捕囚の地で帰還を待ち、そして何百年も、メシアを待ちました。詩編にはこうあります。わたしの魂は主を待ち望みます。見張りが朝を待つにもまして。夜通し城壁に立つ見張りの、あの、朝は必ず来るという確信と、しかし朝を早めることはできないという無力との、混ざり合った時間。それが、聖書の、待つ、です。

ルカ福音書には、待ち続けた老人たちが登場します。シメオンとアンナ。神殿で、慰めを待ち続けて年老いたふたりは、幼子イエスを腕に抱いて、ようやく言います。今こそ、安らかに去らせてくださいます、と。教会の一年が、待降節という、待つ季節から始まるのは、偶然ではありません。信仰の基本姿勢が、待つことだからです。

ここで、待つことと、忍耐の美化とを、区別しておきたいのです。待たされることは、つらいことです。不当に待たされている人、病室で、避難先で、音沙汰のない相手からの言葉を、待たされ続けている人に向かって、待つのは美德です、と言うのは、慰めではなく暴力でしょう。聖書が語るのは、我慢の勧めではありません。もっと不思議なこと、すなわち、希望とは待つ能力である、ということです。

整理してみます。諦めとは、待つのをやめることです。絶望とは、来ない、と結論することです。希望とは、いつ来るかは知らないが、来る、に向かって開き続けることです。三つの違いは、感情の明るさではなく、時間との関係にあります。希望は、時間の主導権が自分にあることを認めます。その上で、なお、前を向くのです。

そして、聖書の待ち方は、受け身ではありません。たとえ話に出てくるおとめたちは、灯火の油を用意して待ちました。ヤコブの手紙は、秋の雨と春の雨を待つ農夫を描きます。農夫は、雨を降らせることはできませんが、畑を耕さずに待つわけでもありません。待つとは、何もしないことではなく、来たときに受け取れる者であり続けることなのです。欠航の続く島の台所が、それでも回っているのと同じです。海は動かさない。けれども、棚には備えがあり、船が来る朝には、港に立っている。

待てる、ということは、結局、信頼の別名です。誰を、何を待つのか。その相手への信頼の分だけ、人は待てるのです。

三、日々の生活へ

あなたは今、何を待っているでしょうか。

検査の結果が出る日を。転職の返事を。反抗期の子が、また口をきいてくれる日を。あるいは、祈りの応答を。

待つ時間の苦しさの半分は、その時間が空白に見えることから来ます。けれども、待っている時間に、できることが、実はあります。おとめたちの油に当たるものです。体を整えること。日々の小さな務めを続けること。来たときに受け取れる自分であること。それらは、結果を早めはしませんが、待つ時間を、空白から準備へと変えてくれます。

もうひとつ。待てない時代の中で、待てる人がそばにいることは、それだけで力になります。急かさない親。答えを急がせない友人。変わるまで待ってくれた誰かの記憶を、あなたも持っているのではないのでしょうか。今度は、あなたが誰かを待つ番なのかもしれません。

船は、あなたの都合では来ません。けれども、海が永遠に荒れ続けたことは、まだ一度もないのです。

四、結びの黙想

いま待っているものを、ひとつ、思い浮かべてみます。

それを待てる根拠は、何でしょうか。

根拠が見つからなければ、今夜はこの一句だけを借りて眠ります。

見張りが朝を待つにもまして。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 聖書の民は「待つ民」であり、詩編は「見張りが朝を待つにもまして」と歌う。
- ・ 教会の一年は待降節という「待つ季節」から始まる——信仰の基本姿勢は待つことである。
- ・ 諦め（待つのをやめること）、絶望（来ないと結論すること）、希望（来る、に向かって開き続けること）は区別される。
- ・ 聖書の待ち方は受け身ではない——たとえ話のおとめたちのように、来たときに受け取れる者であり続けることが求められる。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1817-1821 希望の徳——永遠の生命と神の約束への信頼。

CCC 522-524 待降節——旧約における救い主への待望の準備期間。

ルカ2:25-38 シメオンとアンナ——待ち続けた老人たちの物語。

用語解説

待降節 クリスマスを待ち備える教会暦の季節。信仰の基本姿勢としての「待つこと」を体現する。

希望 「いつ来るかは知らないが、来る、に向かって開き続けること」。楽観とも諦めとも異なる徳。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ いま待っているものを一つ思い浮かべてみましょう。それを待てる根拠は何でしょうか。
- ・ 根拠が見つからなければ、「見張りが朝を待つにもまして」という一句だけを借りて眠ってみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「待つのは美德です、と言うのは慰めではなく暴力になりうる」という警告を、不当に待たされている信徒(病者、被災者など)への配慮にどう活かしますか。
- ・ 「待つとは何もしないことではなく、来たときに受け取れる者であり続けること」という理解を、待降節黙想の指導にどう展開しますか。

第24課 慶良間の海

テーマ:「**見えないものは存在しないのか**」

一、沖縄の風景から

那覇の泊港から高速船で一時間足らず。慶良間諸島の海は、世界のダイバーが憧れる青、ケラマブルーと呼ばれる色をしています。

座間味の浜から、シュノーケルをつけて、顔を水に沈めます。その瞬間、不思議なことが起きます。水が見えないのです。透明度が高すぎて、魚たちが、何もない空間に浮かんでいるように見えます。白い砂地に、自分の影と、船の影が落ちています。水中なのに、まるで宙に浮いているようです。

サンゴの上をスズメダイの群れが流れ、ウミガメが、ゆっくりと呼吸をしに上がっていきます。冬になれば、この海域にはザトウクジラが子育てに帰ってきて、船の上から、潮吹きと尾びれが見えます。

浜に上がって、濡れた髪から水が滴って、ようやく思い出すのです。ああ、あれは全部、水の中だったのだ、と。あんなに満ちていたのに、一度も、見えなかったのに。

見えないものは、存在しない。近代の私たちは、おおむね、その原則で生きています。証拠を見せてください、と。

けれども、慶良間の海は、静かな反例です。あの海で水が見えないのは、水が存在しないからではありません。透明だからです。見えない理由には、少なくとも二種類あるのです。存在しないから見えないものと、透明だから見えないものと。

では、私たちの人生を満たしているもののうち、どれだけが、後者なのでしょう。

二、教会は何を教えるか

恩寵、という言葉があります。神の恵み。信仰の中心にある言葉ですが、正直に言うと、多くの信仰者は、それを、感じて、はいません。劇的な回心の体験談は確かに存在しますが、それは例外です。大多数の信仰生活は、何も感じない日々の連続です。祈っても、静かなまま。ミサに与っても、特別な何かは降ってくるわけではない。そして人は不安になります。何も感じないのは、何もない、ということではないのか、と。

教会の伝統は、この不安に、慶良間の海と同じ答え方をしてきました。恩寵は、透明である、と。パウロはアテネで、こう語りました。私たちは神の中に生き、動き、存在している。水の中の魚が水に気づかないように、恵みの中にいる者は、恵みに気づかない。アウグスティヌスは、神について、私の最も内なる部分よりも、さらに内におられる方、と書きました。遠すぎて見えないのではありません。近すぎて、見えないのです。

考えてみれば、私たちを本当に支えているものは、たいてい透明です。空気。健康。今朝も心臓が動いていたこと。誰かに赦されてきたこと。当たり前のものは、機能している間、見えません。見えるようになるのは、失われたときです。病んで初めて、健康という水の中を泳いでいたことを知ります。人を失って初めて、その人がどれほどの空間を満たしていたかを知ります。透明なものは、不在によってしか、輪郭を現さないのです。

それでは、あまりに切ない。だから教会には、秘跡があるのだと思います。水を注ぎ、パンを裂き、油を塗り、手を置く。秘跡とは、透明な恩寵に、手触りを与えるしるしです。ただし、誤解してはいけません。秘跡は、恩寵の製造装置ではありません。透明な水に、指を差し入れるようなものです。波紋が立って、ほら、ここに水がある、と分かる。恵みは、儀式の瞬間に発生するのではなく、最初から満ちていて、秘跡は、それを指し示すのです。

ですから、見える体験を追い求める必要は、ありません。特別な実感、劇的なしるし、鳥肌の立つような瞬間。それらを求めて渡り歩くことは、透明な海に色がついていないと文句を言うのに似ています。復活のイエスは、トマスに言いました。見ないのに信じる人は、幸いである。それは、根拠なしに信じ込め、という命令ではなく、透明さに耐えられる者への、祝福なのだと思います。

三、日々の生活へ

何も感じない祈り。実感のない信仰生活。教会に長く通う人ほど、この乾きを、こっそり抱えています。あなただけではありません。そして、乾きは不在の証拠ではありません。海の真ん中にいる者に、海は見えないのです。

信仰の話を離れても、同じことが言えます。あなたを今日支えていたものを、数えてみてください。朝、起こしてくれた人。あなたの知らないところで動いていた電気と水道。黙って続けられている家族の家事。あなたのミスを、指摘せずに直しておいてくれた同僚。どれも、透明です。機能している限り、感謝の対象にすらなりません。

透明なものを見る訓練が、たぶん、感謝と呼ばれるものの正体です。失ってから輪郭に気づくのではなく、満ちているうちに、時々、指を差し入れてみる。こと。ありがとう、という言葉は、透明な水に立てる、小さな波紋です。

四、結びの黙想

今日一日、あなたを支えていた透明なものを、三つ、挙げてみます。

ひとつは物を。ひとつは人を。ひとつは、それ以外の何かを。

三つ目が見つかったとき、あなたはもう、恩寵の話をしています。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 見えない理由には少なくとも二種類ある——存在しないから見えないものと、透明だから見えないもの。
- ・ パウロはアテネで「私たちは神の中に生き、動き、存在している」と語った——恵みは遠すぎてではなく、近すぎて見えない。
- ・ 秘跡は恩寵の製造装置ではなく、最初から満ちている透明な恵みに手触りを与えるしるしである。
- ・ 復活のイエスの「見ないのに信じる人は幸いである」は、根拠なしに信じ込めという命令ではなく、透明さに耐えられる者への祝福である。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1084 秘跡はキリストの働きを可視化する効果的なしるしである。

CCC 1131 秘跡と恵み——目に見えるしるしを通して働く神の恵み。

ヨハネ20:29 「見ないのに信じる人は、幸いである」。

使徒言行録17:28 パウロのアレオパゴスでの説教——「私たちは神の中に生き、動き、存在している」。

用語解説

恩寵(恵み) 神が無償で与える助けと命。多くの場合、劇的な実感を伴わず「透明」に働く。

秘跡 目に見えないしるしを通して、目に見えない恵みを伝える教会のしるし。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 今日一日、あなたを支えていた「透明なもの」を三つ挙げてみましょう。一つは物を、一つは人を、一つはそれ以外の何かを。
- ・ 三つ目が見つかったとき、あなたはもう恩寵の話をしています。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「何も感じない祈り」に悩む信徒への霊的同伴において、「透明な恩寵」の神学をどう慰めとして提示できますか。
- ・ 劇的な回心体験を過度に重視する信心を、この「透明性」の神学でどうバランスよく修正できますか。

第25課 伊江島補助飛行場

テーマ:「土地は誰のものなのか」

一、沖縄の風景から

本部港からフェリーで三十分。伊江島は、島の真ん中に城山、通称タッチューがそびえる、平らで明るい島です。サトウキビ畑と落花生の畑が広がり、その畑のただ中に、米軍の補助飛行場があります。パラシュート降下訓練の日には、畑の上の空に、花のような傘がいくつも開きます。

島の一角に、ヌチドゥタカラの家、という小さな資料館があります。いのちこそ宝、という意味です。建てたのは、農民の阿波根昌鴻。一九五五年、この島の土地は、武装した兵士と重機によって強制的に接收されました。銃剣とブルドーザー、と呼ばれる時代です。家を失った農民たちは、本島を歩いて窮状を訴える行進に出ました。

資料館には、拾い集められた薬莢や模擬爆弾の破片と並んで、一枚の掟書きが掲げられています。米軍との交渉に臨む農民たちが自らに課した、陳情規定です。会うときは必ず座ること。手を耳より上に上げないこと。大声を出さず、道理をもって話すこと。武器を持つ相手の前で、徹底して非暴力を貫くための、細やかな作法の数々です。

畑の緑と、金網と、掟書き。この島の風景は、土地とは何か、という問いを、七十年間、抱え続けてきました。

土地は誰のものか。この問いを登記簿の話にしまえば、答えは簡単です。名義人のもの。対価を払えば、移転できる。

二、教会は何を教えるか

けれども、伊江島の農民たちが言い続けたのは、別のことでした。この土地は、先祖から預かり、子孫に渡すものだ、と。売り買いの目的語ではなく、預かり物。

所有とは、いったい何なのでしょう。私のもの、という言葉は、どこまでのことを言ってよい言葉なのでしょう。

旧約聖書のレビ記に、驚くべき規定があります。ヨベルの年。五十年ごとに、売られた土地はすべて、元の家に戻されなければならない、というのです。その理由として、神はこう語ります。土地を売り渡して、買い戻せなくてはならない。土地はわたしのものであり、あなたたちはわたしの土地に寄留し、滞在する者にすぎない、と。土地の究極の所有者は神であって、人間はみな、借地人だという宣言です。この規定が歴史の中で実際にどこまで守られたかは分かっていません。けれども、守られなかったとしても、この理念が律法の真ん中に刻まれたこと自体が、重い事実です。

列王記には、ナボトのぶどう畑の物語があります。アハブ王が、宮殿の隣のぶどう畑を欲しがり、良い値で買おう、と持ちかけます。ナボトは断ります。先祖伝来の嗣業の土地を譲ることは、主にかけて、できません。値段の問題ではないのです。それは彼にとって、売り物ではなく、預かり物だったから。王妃イゼベルは偽りの裁判を仕立ててナボトを殺し、畑を奪います。そこへ預言者エリヤが遣わされ、王を真っ向から断罪します。権力による土地の収奪は、聖書が最も鋭く告発した罪のひとつでした。伊江島の掟書きを読むとき、私はナボトを思い出します。武力も財力も持たない者が、これは預かり物だ、という一点だけを握って、王の前に立つ姿を。

創世記にさかのぼれば、人間の最初の職業は、庭師でした。神は人を園に置き、耕させ、守らせた、とあります。所有者としてではなく、管理を託された者として。この、委託、という考え方を、カトリック社会教説は受け継いできました。教会は私有財産を否定しません。けれども、絶対化もしません。地の富は、本来すべての人を養うために与えられている。所有には、その目的に仕える限りでの正当性がある、と考えるのです。

委託と考えると、何が変わるのでしょうか。ふたつ変わります。ひとつは、手入れです。預かり物は、粗末にできません。使い潰す自由は、預かった者にはないからです。もうひとつは、視線の先です。所有は現在で完結しますが、委託には、返す相手、渡す相手がいます。先祖から受け取り、子孫へ手渡す。地球は先祖からの相続財産ではなく、子孫からの借り物だ、という言葉が、よく引かれます。ヨベルの年の思想は、形を変えて、現代の環境の問いにまで届いているのです。

三、日々の生活へ

土地は誰のものか。伊江島の畑は、答えの代わりに、問いの立て方を変えてきます。誰のものか、ではなく、誰から預かり、誰へ渡すのか、と。

持ち家。実家。相続の話し合い。空き家になったままの祖父母の家。土地と建物をめぐる悩みは、たいていの家族が、いつかは通ります。そして相続の争いがこじれるのは、多くの場合、それを、分け合う権利、としてだけ扱うときです。誰から預かって、誰に渡すのか、という視線が入ると、話の重心が少し変わることがあります。

私のものだから何をしてもいい、という言葉の射程も、考え直してみたいのです。法律上はその通りでも、私のもの、と呼んでいるもののほとんどは、実は預かり物に似ています。体。才能。時間。子ども。役職。どれも、自分で作ったものではなく、手元に来て、いつか手を離れていくものです。

委託の感覚は、人を萎縮させません。むしろ、手入れの喜びと、手渡す相手への想像力を与えてくれます。庭師は、庭を所有していないからこそ、庭を美しくできるのかもしれません。

四、結びの黙想

あなたが、私のもの、と呼んでいるものを、ひとつ選びます。

それを、預かりもの、と言い換えてみます。

誰から預かったのでしょうか。誰に、渡すのでしょうか。

言い換えた途端に、手入れがしたくなったなら、それが答えです。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ ヨベルの年(レビ記25章)は、土地の究極の所有者は神であり、人間はみな寄留者にすぎないと宣言する。
- ・ ナボトのぶどう畑の物語(列王記上21章)は、権力による土地の収奪を聖書が最も鋭く告発した罪の一つとして描く。

- ・ 創世記において人間の最初の職業は「庭師」であり、所有者としてではなく管理を託された者としてであった。
- ・ カトリック社会教説は私有財産を否定しないが絶対化もせず、財の普遍的分配という原則の下に位置づける。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2402-2406 私有財産権とその普遍的分配(すべての人のための財)という原則。

CCC 2415-2418 被造物の完全性の尊重と将来世代への責任。

レビ記25章 ヨベルの年——土地は神のものであり、人間は寄留者である。

列王記上21章 ナボトのぶどう畑——土地の収奪への預言者の告発。

用語解説

ヨベルの年 50年ごとに土地が元の家に戻されるべきとするレビ記の規定。所有の絶対性を相対化する。

財の普遍的分配 地の富はすべての人を養うために与えられているというカトリック社会教説の原則。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたが「私のもの」と呼んでいるものを一つ選び、「預かりもの」と言い換えてみましょう。
- ・ 誰から預かり、誰に渡すのでしょうか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 土地収用や基地問題をめぐる正義の議論に、カトリック社会教説の「財の普遍的分配」の原則をどう適用して説明しますか。
- ・ 相続や空き家問題に悩む信徒に対し、「委託」という視点をどのように実助言に結びつけられますか。

第26課 アメリカンビレッジ

テーマ:「豊かさは人を自由にするのか」

一、沖縄の風景から

北谷、美浜のアメリカンビレッジ。長らくこの街のシンボルだった観覧車は、数年前に姿を消しましたが、街の賑わいは変わりません。パステルカラーの外壁が続くデポアイランド、海沿いのボードウォーク、撮影の順番待ちができる壁の前。

雑貨店、古着屋、アイスクリーム、ステーキ、タコライス。手ぶらで来ても、両手が袋でふさがって帰ることになる街です。夕暮れになると、海沿いのカフェの席が埋まり、誰もがサンセットにレンズを向けます。欲しいものが、だいたい何でもある。楽しくないはずが、ありません。

本書の第6課で、この一帯が米軍基地の跡地であることには触れました。今回は、跡地の歴史ではなく、いま目の前にある光景そのものを見つめてみたいのです。買い物袋を提げて歩く、私たち自身の姿を。

日が沈みきると、袋の重さだけが、手に残ります。今日買ったものを、明日も同じ熱で欲しいかどうかは、明日にならないと分かりません。

豊かさは、人を自由にする。私たちは、そう約束されて育ちました。買えるものが増えるほど、選択肢が増え、選択肢が増えるほど、人は自由になる、と。

けれども、クローゼットは服であふれているのに着る服がなく、動画は無限にあるのに観たいものが見つからず、便利になったはずの暮らしは、なぜか、ますます忙しい。

豊かさは、本当に、人を自由にするのでしょうか。所有と自由は、同じ方向を向いているのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

マルコ福音書に、ひとりの青年が登場します。金持ちの青年、と呼ばれ慣わされてきた人です。彼は走り寄ってイエスにひざまずき、永遠のいのちを受け継ぐには何をすべきか、と尋ねます。立派な人でした。錠は少年の頃からみな守ってきた、と言うのです。そのときの一行を、福音書はわざわざ書き残しています。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。それから、わたしに従いなさい、と。青年は、この言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去ります。たくさんの財産を持っていたからである、と福音書は結びます。

この場面は、財産への断罪として読まれがちですが、錠は、慈しんで、という一語にあります。イエスは彼を裁いたのではなく、診断したのです。この人の場合、何が彼を縛っているのか。彼は財産を持っていました。しかし立ち去るあの後ろ姿を見る限り、実際には、財産のほうが、彼を持っていたのです。

ここに、所有と自由の関係を考える糸口があります。自由とは、選択肢の数のことではありません。手放せる力のことです。買う自由をどれだけ積み上げても、買わない自由、持たない自由、手放す自由が痩せていくなら、その人は豊かさの中で不自由になっていきます。コヘルトの言葉は、その構造を三千年前に見抜いていました。目は見飽きることがない、と。満たすことで消える渇きなら、とうに消えているはずなのです。

誤解のないように言えば、教会は、豊かさそのものを敵視しません。本書の第19課で見たように、聖書は宴を肯定し、イエスは祝いの席の似合う方でした。物が悪なのではないのです。修道者が清貧を誓うのは、物が汚れているからではなく、執着が人を占領することを知っているからです。問題はいつも、物と人との、力関係のほうにあります。

そして、力関係を変える鍵を、伝統はひとつ知っています。感謝です。同じ物でも、自分の力で獲得した戦利品として持つのと、与えられた贈り物として持つのとでは、関係がまるで違います。戦利品は握りしめるしかありませんが、贈り物は、感謝とともに受け取り、いつか手放すことも、誰かに回すこともできます。広告是一日中、あなたにはまだこれが足りない、と語りかけてきます。福音の語りかけは、その逆です。あなたはすでに、与えられている。どちらの声を基調にして暮らすかで、同じ豊かさが、鎖にも恵みにもなるのです。

三、日々の生活へ

使っていないサブスクの請求。着ていない服の詰まったクローゼット。捨てられないまま部屋の隅に積まれた箱。私たちの暮らしには、かつて欲しかったものたちの、静かな在庫があります。

買い物の高揚が、届いた瞬間に冷めていく、あの感じを、多くの人が知っています。欲しかったのは物そのものではなく、選んで、決めて、待つ間の物語だったのかもしれない。だとすれば、渴きの正体は、所有では癒えないところにあります。

近年の片づけや手放しのブームは、その意味で、示唆的です。人々が飢えているのは、もっと持つ自由ではなく、手放す自由のほうなのでしょう。

試しに、ふたつのリストを作ってみてください。お金で買えたもののうち、最良のもの。お金で買えなかったもののうち、最良のもの。ふたつ目のリストのほうが書きやすかったなら、あなたの豊かさの中心は、すでに、店では売っていない場所にあります。

四、結びの黙想

手放したら自由になれる気がするものを、ひとつ、思い浮かべてみます。

今夜、実際に手放さなくても、かまいません。

ただ、それを、贈り物、と呼び直してみます。

握った拳が、少しゆるんだら、それが自由の感触です。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 金持ちの青年の物語(マルコ10章)で、イエスは彼を「慈しんで」見つめた——財産のほうを彼を持っていたという診断である。
- ・ 自由とは選択肢の数ではなく、「手放せる力」のことである。
- ・ 教会は豊かさそのものを敵視しない——問題は物と人との力関係にある。

- ・ 力関係を変える鍵は感謝である。戦利品は握りしめるしかないが、贈り物は感謝とともに受け取り、手放すこともできる。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2544-2547 心の貧しさ——富への執着からの自由。

CCC 2536 貪欲・強欲から自由になること。

マルコ10:17-22 金持ちの青年——「慈しんで」見つめられながらも、悲しみながら立ち去った。

用語解説

清貧 修道者が誓う徳の一つ。物そのものを否定するのではなく、執着からの自由を目指す。

心の貧しさ 山上の説教で祝福される態度。富の有無にかかわらず、神への依存を保つ心の姿勢。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 手放したら自由になれる気がするものを一つ思い浮かべてみましょう。
- ・ 今夜、実際に手放さなくてもかまいません。ただ、それを「贈り物」と呼び直してみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 消費文化に生きる青年信徒に、「自由とは手放せる力」という逆説的な福音のメッセージをどう伝えますか。
- ・ 「豊かさの中で不自由になる」現代の構造を、清貧の霊性の要理教育にどう現代的に翻訳できますか。

第27課 台風前日のスーパー

テーマ:「備えることと恐れることは違うのか」

一、沖縄の風景から

台風接近の前日、スーパーの棚から、ものが消えていきます。食パンの棚が空になり、カップ麺が薄くなり、水のペットボトルに購入制限の札が立ちます。レジには長い列。駐車場の出入りも、ガソリンスタンドの列も、いつもより長い。

それでも、殺気立った感じはありません。沖縄の台風前は、むしろ淡々としています。ベランダの鉢植えを室内に入れ、物干し竿を下ろし、窓に養生テープを貼り、懐中電灯の電池を確かめる。手順は、みんな体で覚えています。店先で、おばあが言います。今度のは、大きいよ。予報の細かい数字より、その一言のほうが、よほど効きます。

夕方、空の色が変わり始めます。風はまだ弱いのに、雲の流れだけが速い。祭りの前夜にも似た、奇妙に静かな高揚が、町を包みます。

やがて雨戸が閉まり、町は息をひそめ、嵐を待ちます。

備えることと、恐れること。ふたつは、どう違うのでしょうか。備蓄も戸締まりも、恐れの実現だと言われれば、そんな気もします。

一方で、信仰は、思い悩むな、と教えます。明日のことは明日自らが思い悩む、と。では、台風前日の買い出しは、信仰の足りなさの現れなのでしょうか。

不安と希望の境界線は、どこに引かれているのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書で最初の、備えた人、は、ノアでしょう。神は洪水の到来を告げ、ノアは箱舟を造りました。ここで見落とせないのは、順序です。信仰は、洪水は来ない、と信じることはありませんでした。洪水は来る。その告知を正面から受け取った上で、なすべきことをなす。それがノアの信仰です。危険の否認は、聖書の語る信仰では、ないのです。

では、あの、思い悩むな、はどう読むべきでしょうか。マタイ福音書の山上の説教です。空の鳥を見なさい、野の花を見なさい、明日のことまで思い悩むな。注意したいのは、同じ説教の中で、イエスが弟子たちに、今日の糧を今日求める祈りを教えていることです。私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。つまり、糧の心配そのものが禁じられているわけではありません。禁じられているのは、思い悩み、心がふたつに裂けて、今日なすべきことが手につかなくなる状態です。備えは、今日できることを今日することです。思い悩みは、今日できないことを、今日抱え込むことです。ふたつは、似て非なるものなのです。

恐れについても、聖書は正直です。ゲツセマネの園で、イエス自身が、恐れしました。わたしは死ぬばかりに悲しい、と言い、地面にひれ伏して、この杯を取りのけてください、と祈ったのです。恐れは、罪ではありません。信仰の欠如でもありません。イエスは恐れを消してから立ち上がったのではなく、恐れの中で祈り、祈りの中から、立ちなさい、行こう、と歩き出しました。

ここから、三つの態度を区別できます。危険を前にしたパニックは、恐れの不成熟な形です。買い占めに走る心は、不安に飲まれています。危険の否認は、恐れ拒絶です。大したことにはならないさ、という楽観は、勇気に見えて、実は現実から目を逸らしています。そして備えは、恐れの不成熟な形です。沖縄の人々が台風前に淡々と手を動かすのは、台風を軽く見ているからではありません。逆です。海と風の力に敬意を払っているからこそ、騒がず、侮らず、備えるのです。

希望と楽観は、ここで分かります。楽観は、悪いことは起きない、という予測です。予測ですから、外れます。希望は、何が起きても、支えは失われない、という信頼です。楽観は嵐の進路次第で崩れますが、希望は、嵐が直撃しても、停電の暗闇の中でも、立っていられます。希望は、危険の否定ではないのです。危険を直視したまま、なお、その先に開かれていること。台風前日の、あの淡々とした買い出しの列は、案外、希望の正しい姿勢に、よく似ています。

三、日々の生活へ

健康診断の案内を、何年も無視している人がいます。結果を知るのが怖いからです。それは、恐れていないのではなく、恐れを直視できずにいる状態、つまり否認です。逆に、保険に入り続け、備蓄を増やし続け、それでも夜眠れない人もいます。備えが完了しないのは、備えているのではなく、思い悩んでいるからです。

見分ける物差しは、単純です。備えは、行動すれば、いったん完了します。テープを貼り終えたら、あとは嵐を待つだけです。思い悩みは、行動を伴わないまま、いつまでも続きます。もし、ぐるぐると同じ心配を繰り返しているなら、自分に問うてみてください。この心配について、今日できることは、あるか。あるなら、それをする。ないなら、それは今日の荷物ではありません。

子どもの将来、親の老い、自分の健康。人生の台風は、進路予想の出ないものばかりです。だからこそ、今日の分の備えをして、今日の分の糧を祈って、雨戸を閉めて眠る。その繰り返しが、思い悩みと備えとを分ける、暮らしの技術なのだと思います。

そして、台風の去った翌朝の、あの空を思い出してください。沖縄の台風明けの空は、洗い上げられたように青い。嵐は、必ず、通り過ぎるのです。

四、結びの黙想

いま、心配していることを、ひとつ、取り出してみます。

それについて、今日できる備えは、あるでしょうか。

あるなら、明日それをする決めて、眠ります。

ないなら、今夜のところは、雨戸を閉めるように、そっと手放して。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ ノアの箱舟の物語では、信仰は危険の否認ではなく、危険の告知を正面から受け取った上でなすべきことをなすことである。

- ・「思い悩むな」(マタイ6章)は備えの禁止ではなく、「今日できないことを今日抱え込む」思い悩みの禁止である。
- ・ ゲツセマネでイエス自身が恐れた——恐れは罪でも信仰の欠如でもなく、恐れの中で祈ることができる。
- ・ 希望と楽観は異なる。楽観は「悪いことは起きない」という予測であり外れうるが、希望は「何が起きても支えは失われない」という信頼である。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 305 神の摂理と人間の責任ある協力——「思い悩むな」の正しい理解。

CCC 2830 「日ごとの糧を今日与えたまえ」の祈りの意味。

CCC 612 ゲツセマネでのイエスの苦悶と祈り。

マタイ6:25-34 山上の説教——明日のことを思い悩むな。

用語解説

摂理 神が世界を導く配慮。人間の努力や備えを排除しない。

思い悩み 今日できないことまで今日抱え込み、心が引き裂かれる状態。備えとは区別される。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ いま心配していることを一つ取り出してみましょう。それについて、今日できる備えはありますか。
- ・ あるなら、明日それをすると決めて眠りましょう。ないなら、今夜のところはそっと手放してみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 不安障害的な傾向を持つ信徒に対し、「思い悩みと備えの違い」という識別を、心のケアの専門的支援と併せてどう提示しますか。
- ・ 「楽観と希望の違い」を、災害への備えについての教会の防災教育・地域連携にどう組み込みますか。

第28課 24時間営業のコンビニ

テーマ:「孤独は悪なのか」

一、沖縄の風景から

深夜二時、国道沿いのコンビニ。闇の中に、そこだけ光の箱が浮かんでいます。

自動ドアが開いて、夜勤明けの作業服が入ってきます。カゴに弁当と缶コーヒー。雑誌の棚の前には、タクシーの運転手。イトインの隅では、若者がひとり、カップ麺をすすりながらスマートフォンを眺めています。レジには、外国から来た留学生の店員。いらっしゃいませ、の声だけが、時々、店内に響きます。

誰も、誰とも話しません。けれども、誰もが、ここに来ます。明るくて、開いていて、人の気配があるからです。買うものは口実で、本当は、この灯りに用がある夜も、あるのかもしれない。

店を出ると、外は静かです。振り返ると、光の箱は、まだそこにあります。眠らない町の、常夜灯のように。

単身世帯が、家族のかたちの最多数派になった時代です。孤独は、社会の病として語られるようになりました。孤独担当の大臣を置く国さえあります。

孤独は、確かに人を蝕むことがあります。けれども、立ち止まって問うてみたいのです。孤独は、それ自体が、悪なのでしょうか。独りでいることは、常に、解決されるべき問題なのでしょうか。

深夜のコンビニで、ひとりカップ麺をすする時間は、不幸せの証拠なのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

聖書は、孤立を祝福しません。創世記は、人が独りでいるのは良くない、と語ります。閉じ込められた孤独、望まない孤立が人を蝕むことを、聖書も教会も、よく知っています。誰にも看取られない死や、助けを求める声の届かない部屋を、美化するつもりは、まったくありません。

けれども福音書には、もうひとつの線が、はっきりと引かれています。イエスは、繰り返し、独りになったのです。朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。群衆に囲まれ、求められ続けた人が、群衆を離れる時間を、自分に許していました。後の時代、砂漠へ退いた師父たちも、独居の中でこそ神と出会う道を歩みました。独りであることは、キリスト教の伝統の中で、単なる欠乏ではなく、祈りの母胎でもあったのです。

ここから、ふたつの独りを、区別することができます。選び取られた独り、いわば孤独と、閉じ込められた独り、いわば孤立です。前者は人を深くし、後者は人を蝕みます。厄介なのは、外から見ただけでは、区別がつかないことです。深夜のコンビニのあの若者が、静けさを味わっているのか、行き場がないのかは、隣のレジからは分かりません。

さらに厄介なことに、孤立は、人の輪の中でも起きます。ゲツセマネの夜、イエスのそばには弟子たちがいました。それでも彼らは眠りこけ、イエスは言います。一時も、目を覚ましていられなかったのか。人といながらの孤独ほど、深い孤独はありません。そして十字架の上で、あの叫びが上がります。わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのか。教会が信じてきたのは、神の子がこの叫びを叫んだ、と

ということです。つまり、孤独の底には、先客がいるのです。あなたがどんな孤独に沈んでも、そこは、誰も踏んだことのない場所ではありません。

だから、共同体の礼賛では、この問いは解けません。共同体は万能薬ではないのです。群れの中の孤独があり、絆という名の同調圧力があり、人は集いに疲れもします。共同体の務めは、孤独を撲滅することではないのだと思います。孤独のそばで、灯りを消さないことです。介入せず、詮索せず、しかし、開いている。深夜のコンビニの灯りが、期せずして果たしているあの役割を、教会もまた、果たせているでしょうか。扉は、日曜の午前中しか、開いていないのではないのでしょうか。

三、日々の生活へ

独りの夜を、すぐに埋めてしまう癖が、私たちにはあります。画面を開き、音を流し、予定を入れる。孤独は、味わう前に、消されていきます。けれども、選ばれた孤独は、人生に必要な栄養です。誰の期待も演じなくていい時間に、人は自分の輪郭を取り戻します。独りの時間を恐れない練習は、埋める前に、まず五分、孤独に座ってみることから始まります。

一方で、あなたの独りが、選んだものではなく、閉じ込められたものになっているなら。どうか、灯りのある場所へ出てください。大げさな場所でなくていいのです。コンビニでも、図書館でも、教会の開いている扉でも。人と話さなくても、人の気配の中に身を置くことは、孤立の壁に、小さな窓を開けます。

そして、余力のある人は、誰かの常夜灯になることを考えてみてください。立ち入った介入ではなく、消えない灯りであること。おはよう、と毎朝声をかける。返事を急かさない連絡を、時々入れる。いつでもおいで、と言って、本当にいつでも開けておく。孤独を消してあげることは、誰にもできません。けれども、孤独のそばに灯りを置くことなら、誰にでもできるのです。

四、結びの黙想

あなたの今の独りは、選んだ孤独でしょうか。閉じ込められた孤立でしょうか。

前者なら、今夜はその静けさを、ゆっくり味わってみます。

後者なら、明日、灯りのある場所をひとつ、訪ねてみます。

どちらの夜にも、先客がいることを、忘れずに。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 創世記は「人が独りでいるのは良くない」と語り、望まない孤立が人を蝕むことを聖書も教会も知っている。
- ・ 同時にイエスは繰り返し独りになり、人里離れた所で祈った——独りであることは祈りの母胎でもある。
- ・ 「選び取られた独り(孤独)」と「閉じ込められた独り(孤立)」は区別されるが、外からは区別がつきにくい。
- ・ 十字架上の「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのか」という叫びは、あらゆる孤独の底に「先客」がいることを示す。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 2602 イエスの孤独な祈り——人里離れた所で祈られたイエスの姿。

CCC 2719 砂漠の師父たちの独居の霊性。

CCC 603 十字架上のイエスの見捨てられの叫びの神学的意味。

用語解説

孤独と孤立 選り取られた独り(孤独)は人を深くし、閉じ込められた独り(孤立)は人を蝕む。区別が肝要。

見捨てられた叫び 十字架上のイエスの言葉(マルコ15:34)。教会は神の子がこの叫びを叫んだと信じる。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの今の独りは、選んだ孤独でしょうか、閉じ込められた孤立でしょうか。
- ・ 後者であれば、明日、灯りのある場所(教会も含めて)を一つ訪ねてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「共同体は孤独の万能薬ではない」という視点を、活発な信徒活動を通じても孤立が起こりうる現実の司牧的認識にどう反映させますか。
- ・ 「常夜灯になる」(介入せず詮索せず、しかし開いている)という関わり方を、訪問活動や電話訪問のガイドラインにどう具体化できますか。実際に自殺念慮など深刻な兆候がある場合は、専門機関へのつながりも必要であることに留意しましょう。

第29課 普天間飛行場

テーマ:「危険は誰が引き受けるのか」

一、沖縄の風景から

宜野湾市、嘉数高台公園。展望台に上ると、眼下に、普天間飛行場が広がります。市街地のただ中に横たわる滑走路。基地をドーナツ状に取り囲んで、住宅と、学校と、病院がひしめいています。駐機場には、オスプレイの機影が見えます。

この丘は、沖縄戦の激戦地でした。展望台のすぐ下には、日本軍のトーチカの跡が残り、弾痕の刻まれたコンクリートに、修学旅行の生徒たちが手を触れていきます。ガイドが説明します。この丘から見えるのは、過去の戦場と、現在の基地の、ふたつの風景です、と。

普天間は、かつて、世界一危険な飛行場、と呼ばれました。返還の合意がなされたのは一九九六年。それから三十年になります。滑走路は、まだ、そこにあります。

生徒たちが、金網の向こうを黙って見えています。フェンスのこちら側の校庭から、部活動の掛け声が、風に乗って届いてきます。

この飛行場の危険を取り除くべきだ、という一点には、ほとんど誰もが賛成します。意見が割れるのは、その先です。危険は、消えるのではなく、移動するからです。県内へか、県外へか、国外へか。誰もが除去に賛成し、誰もが受け入れには沈黙する。

国土のおよそ〇・六パーセントの面積に、在日米軍専用施設の約七割。この数字が語っているのは、賛否の前に、まず、配分の事実です。

安全の利益は広く薄く行き渡り、危険の負担は狭く深く沈殿する。危険は、誰が引き受けるのでしょうか。そして、それを決めているのは、誰なのでしょう。

二、教会は何を教えるか

本書の第7課では、辺野古の海を前に、正義と正義の衝突を考えました。今回は、その手前にある、もっと古い問いを見つめます。共同体は、重さをどう配るのか、という問いです。

レビ記の十六章に、印象深い儀式が記されています。年に一度の贖罪の日、大祭司は二頭の山羊を用意し、一頭を神に献げ、もう一頭の頭に手を置いて、民のすべての罪を告白します。罪を負わされたその山羊は、アザゼルの山羊と呼ばれ、荒れ野の彼方へと追いやられました。共同体の重さを、一頭に集めて、視界の外へ送る。人間の共同体が古くから備えてきた、重荷の処理装置の、原型のような光景です。集めて、遠ざけて、そして、忘れる。

聖書がこの儀式を記録したのは、その仕組みを人間に見せるためだったのかもしれませんが。なぜなら、預言者イザヤは後に、恐るべき一節を書くからです。苦難の僕の歌。彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたのだと。担がれている側は、担いでいる者を見ない。それどころか、あれはあの人自身の問題なのだ、と考える。負担の集中は、いつも、この視線の切断とセットで起きるのです。あの人たちの土地の問題。あの町の問題。私の問題では、ない。

キリスト教は、十字架を、この歌の成就として読むことができました。ひとりに重さが集められ、城壁の外へ追いやられた、あの出来事を。そしてパウロは、その方につながる共同体の掟を、一行で書きました。互いに重荷を担いなさい。そうすれば、キリストの律法を全うすることになる、と。互いに、です。重荷の存在は消せません。消せない重荷を、固定した誰かに沈めるのか、動かしながら分かち合うのか。共同体の質は、そこで決まる、と言うのです。

ですから、この問いは、教会自身にも刺さります。教会の中でも、重さは偏ります。いつも同じ人が掃除をし、いつも同じ家庭が会計を引き受け、いつも同じ誰かが、難しい人の隣に座っている。受益と負担の分離が固定化した共同体は、たとえ礼拝を守っていても、共同体の名に値するでしょうか。

三、日々の生活へ

普天間の正解を、本書は書きません。書けるふりをするのが、いちばんの不誠実だからです。ただ、嘉数の丘から見えるあの風景は、本土に暮らす読者にとって、沖縄問題、という名の他人事ではないはず。私の安全は、いま、誰の騒音の上に成り立っているのか。その問いを自分の住所で受け取ったときに、初めて、あの滑走路はあなたの風景になります。

職場を思い浮かべてください。断らない人のところに、仕事は集まります。便利な人、で済まされているその人の机の上に、共同体の重さが、静かに積み上がっていきます。

家庭ではどうでしょう。親の介護は、結局、誰が。実家に近いから、女だから、独身だから。理由はあとから付けられて、配分はいつの間にか固定され、やがて、感謝すら省略されるようになります。

地域にもあります。ゴミ処理場や処分場は、どの町の隣に。マンションの理事や自治会の役は、誰が。負担の話し合いは重いので、私たちは、決まっている状態、を好みます。けれども、決まっている、の自身は、たいてい、誰かが黙って担い続けている、です。

最初の一步は、制度の改革ではなく、視線の回復だと思います。イザヤの歌が告発したのは、担ぐ者を見ない目でした。あなたの共同体で、いちばん重いものを担いでいる人の名前を、あなたは言えるでしょうか。名前を知り、重さを言葉にして認めること。互いに担う、は、そこからしか始まりません。

四、結びの黙想

あなたの属する共同体を、ひとつ選びます。

そこで、いちばん重いものを担いでいるのは、誰でしょう。

その人の名前を、今夜、思い浮かべます。

そして、来週、その重さについて、本人にひとこと、声をかけてみます。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ 在日米軍専用施設の約7割が国土の約0.6%の面積に集中している——安全の利益は広く薄く、危険の負担は狭く深く沈殿する。

- ・ レビ記のアザゼルの山羊は、共同体の重さを一頭に集めて視界の外へ送る「重荷の処理装置」の原型である。
- ・ イザヤ書の苦難の僕の歌は「担がれている側は、担いでいる者を見ない」という視線の切断を告発する。
- ・ パウロは「互いに重荷を担いなさい」と命じ、重荷を固定した誰かに沈めるのではなく分かち合うことを教会の掟とした。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 1939-1942 連帯の原理——共同体の重荷を分かち合う責任。

CCC 1807 正義の徳——隣人と共同体への正当な負い目を果たす。

レビ記16章 贖罪の日のアザゼルの山羊の儀式。

ガラテヤ6:2 「互いに重荷を担いなさい。そうすれば、キリストの律法を全うすることになる」。

用語解説

連帯 共同体の重荷や責任を分かち合う社会教説上の重要な原理。

スケープゴート 共同体の罪や重荷を一身に負わされ、追いやられる存在(アザゼルの山羊に由来)。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ あなたの属する共同体で、いちばん重いものを担いでいるのは誰でしょうか。
- ・ その人の名前を今夜思い浮かべ、来週、その重さについて本人にひとこと声をかけてみましょう。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 基地負担の不均衡という社会問題を、カトリック社会教説の「連帯」の原理を用いて、政治的立場を押し付けずにどう提示できますか。
- ・ 教会内部での奉仕負担の偏り(いつも同じ人が担う構造)を、この回の視点でどう点検し、是正できますか。

第30課 教会

テーマ:「沖縄は教会に何を教えるのか」

一、沖縄の風景から

日曜の朝、沖縄の小さなカトリック教会。白い壁の聖堂は、台風に耐えるための、低くて頑丈な造りで、す。開け放した窓から風が入り、天井では扇風機が回り、手にうちわを持ったおばあが、開祭前の静けさの中に座っています。

会衆席は、小さな汽水域です。地元で生まれ育った家族。フィリピンから来て、この島で母になった女性たち。ベトナムの技能実習生の青年たち。米軍関係の家族。旅の途中の観光客。聖歌は日本語で、応唱のところどころに、タガログ語と英語の響きが混ざります。

ミサが始まります。人々は立ち、座り、ひざまずき、歌います。平和のあいさつでは、初対面の隣人同士が会釈を交わします。聖体拝領の列には、あらゆる出自の人々が、ひとつの列になって進んでいきます。

閉祭。行きましょう、主の平和のうちに。扉が開くと、外から、蟬の声が流れ込んできます。本書の最初の課、糸満の資料館の外で鳴いていた、あの声と同じ夏の声です。

三十の課にわたって、本書は、同じ型を繰り返してきました。沖縄の風景が問いを発し、教会二千年の知恵がそれに耳を傾け、読者が問いを抱えて帰る、という型です。

最終回は、その型そのものを、ひっくり返してみたいのです。教会は、いつまで、答える側の席に座っていただけるのでしょうか。

沖縄は、教会に、何を教えるのでしょうか。

二、教会は何を教えるか

振り返ってみると、実のところ、教会は本書の歩みのあいだ、ずっと教えられてきました。

摩文仁の礎には、敵味方を問わず名を刻む碑を、教会が二千年経ってもまだ持たないことを、教えられました。漫湖の干潟には、教会そのものが汽水域であり、濁りを恐れて水門を閉じれば死ぬのだ、ということを出させられました。久高島には、真の中心が空白であることを。清明祭には、忘れることもまた慈しみでありうることを。伊江島の農民には、武器を持つ者の前で貫かれる非暴力の作法を。台風前日のスーパーには、恐れ of 成熟した形を。旧盆のエイサーには、心が追いつかない日にも身体が先に祈れることを。教会は答えの倉庫のような顔をして登場しながら、毎回、この島の風景から、何かを受け取って帰っていたのです。

なぜ、教会は生徒になれるのでしょうか。教会が寛容だからでは、ありません。もっと深い理由があります。教会の主ご自身が、境界そのものだからです。

古代の教会は、キリストとは誰か、という問いに何世紀も格闘した末、カルケドンの公会議で、ひとつの言い方に辿り着きました。キリストは、真の神であり、真の人である。そしてその二つは、混合せず、変化せず、分割せず、分離しない、と。肯定の言葉ではなく、四つの否定でしか言えなかったのです。神と人という、決して混ざらないはずの二つが、一つの人格において、分かたれずにある。これは、定義というより、驚きの記録です。もうお分かりでしょう。淡水と海水が、混ざり合いながらどちらもあり続ける場

所を、本書はここまで汽水域と呼んできました。受肉とは、究極の汽水域なのです。神と人との境界線の上に立った方、というより、境界線そのものとなった方。教会が境界を恐れなくてよいのは、境界こそが、主の住所だからです。

そしてもうひとつ。教会の最も古い自己理解は、教師の共同体ではなく、弟子たちの共同体でした。弟子とは、学ぶ者、という意味です。教会は、世界の教師である前に、キリストの生徒です。歴史の中で教会は、教師の席にあまりに長く座り、自分の名の意味を忘れかけたことが、幾度もありました。この島の風景は、その名を思い出させてくれます。あなたは、まず、聞く者ではなかったか、と。

ミサの最後の言葉は、行きましょう、という派遣の言葉です。教会は建物の中に安住するためではなく、扉の外の風景の中へ送り出されるために、集まります。教えるためだけでは、ありません。学ぶために、です。

三、日々の生活へ

本書を読み終えるあなたの手にも、答えの束ではなく、問いの束が残っているはずです。尊厳は失われるのか。死者は何を語るのか。正義はなぜ衝突するのか。孤独は悪なのか。危険は誰が引き受けるのか。どれひとつ、本書は解決していません。それは怠慢ではなく、約束の履行です。問いこそが、本書の主人公だったのですから。

そして、大切なことをひとつ。問いを発するのは、沖縄だけではありません。沖縄は、風景が問う、ということの、鮮やかな教師でした。けれども、あなたの町にも、川があり、市場があり、墓地があり、深夜のコンビニがあります。それらも、ずっと問うてきたのです。足りなかったのは風景の声ではなく、聞く耳のほうかもしれません。

教会に通う方へ。あなたの教会は、地域の教師であると同時に、地域の生徒になっているでしょうか。聖堂の外の風景に、教えを乞うたことがあるでしょうか。教会に足を運んだことのない方へ。教会の扉は、教わりに来る人だけのものではありません。教えに来てくださる方にも、開いています。あなたの抱えてきた問いが、あの共同体を育てることが、本当に、あるのです。

四、結びの黙想

聖堂の扉を出ると、蝉が鳴いています。

最初の朝、あの資料館の外で聞いたのと、同じ夏の声です。

三十の問いを、すべて覚えていなくて、かまいません。

ひとつだけ、抱えて帰りましょう。

風景は、まだ、語り終えていません。

◆ 要理のまとめ

学びの要点

- ・ カルケドン公会議は、キリストが真の神・真の人であり、その二つは「混合せず、変化せず、分割せず、分離しない」と定義した。

- ・ 受肉とは究極の汽水域である——神と人という境界線そのものとなった方こそ、教会の主である。
- ・ 教会の最も古い自己理解は「教師の共同体」ではなく「弟子たちの共同体(学ぶ者)」である。
- ・ ミサの派遣の言葉「行きましょう」は、教会が建物の中に安住するためではなく、扉の外の風景の中へ学びに送り出されるための集いであることを示す。

カテキズム(カトリック教会のカテキズム)参照

CCC 464-469 カルケドン公会議の定式——キリストにおける真の神性と真の人性の一致。

CCC 748-750 教会は救いの秘跡であり、光であるキリストを反映する。

CCC 767-768 教会は旅する神の民として、世界へ派遣される。

CCC 1332 ミサの終わりの派遣の言葉「行きましょう、主の平和のうちに」。

用語解説

カルケドン公会議 451年に開催された公会議。キリストの神性と人性の一致を四つの否定形(混合せず等)で定義した。

位格的結合 キリストにおいて神性と人性が一つの人格において結ばれていること。

派遣 ミサの結びで会衆が世界へ送り出されること。ラテン語のミサ(Missa)の語源。

◆ 分かち合いの問い

【求道者向け】

- ・ 本書を通じて、あなたの中に残った「問い」を一つ選んでみましょう。答えが出ていなくてもかまいません。
- ・ あなたの町にも、川があり、市場があり、墓地があります。それらは、あなたに何を問いかけていますか。

【信徒リーダー向け(要理教師候補)】

- ・ 「教会は教師である前に生徒である」という自己理解を、要理教育のプログラム設計そのものにどう反映させますか(一方向的な教授から、地域文化に耳を傾ける姿勢へ)。
- ・ カルケドンの「境界線そのものとなった方」という受肉理解を、本書全体の神学的統一原理として、信徒リーダー向け講座の総括にどう位置づけますか。